

坂本竜(96回生)



留学生用オリエンテーションの様子

大学では英語で開講されている科目を選択しました。理系の科目から文系の科目まで興味のあるものについて幅広く授業選択ができたことが自身の学びをより広げられたと感じています。授業では、留学生だけでなく学部正規生と関わることもありました。ヨーロッパを中心とした様々な国から来た生徒が日本でおり、生徒の年齢層も幅広く、日本にはないグローバルさを感じることが出来ました。

学習面において、私は2つのことを主に学びました。多文化共生社会とジェンダー・フェミニズム論についてです。1つ目の多文化共生社会については、移民学に関する授業を取り、人種差別問題や移民であるということが就職にどのように影響

2つ目のジェンダー・フェミニズムについては日本で少し学んだこともあり、それぞれの国での教え方の違いや論点の違いについても知ることが出来ました。日本には主に白人のひと々について学習したのですが、留学先では女性のキャリアアップや権利について学ぶことが多かったのが印象的でした。

Geender in Salzburg という授業では、ザルツブルクという都市の歴史と絡めながらジェンダーについて学習でき、ほかの国からの留学生と交流することも多く、友達を作った様々な話をするところ、が来ました。私たちのグループは教育面におけるジェンダー格差についてのプレゼンを行うなどしました。

早稲田大学の授業で英語開講科目には慣れていたものの、最初は自身の意図を見えデイスカッションで堂々と言うこととや見や様々な国のアクセントの違いになるのは難しく、発言の前に考えてしまっていた言えなかったり、議論についていけなかったりと辛い思いもしました。卒業のために単位を取らないといけなかったため、テスト前には一日中図書館にもつてレポートを書いたり勉強をしたり忙しい日々を過ごしました。



韓国からの留学生友人と(右)

関東支部 HF <https://www.tosako-kanto.org/index.html>



学校へ 登校時の景色

ザルツブルクという都市は人口15万人ほどの小さな州ですが、サウンドオブミュージックのロケ地として有名で毎日たくさん観光客が訪れていました。寮から大学に行く際に旧市街を通り、毎日見られる景色がとてもきれいで毎回感動していました。また学校のキャンパスも旧市街の中に点在していて、歴史の重みを感じられる島国日本と異なり、オーストリアでは様々な国の民族が混ざり合っていて、ヨーロッパ系の人たちがたくさんアジア系やアフリカ系、中東系など様々な人種の人たちが共に暮らしていました。自身の想像していたヨーロッパの街と人々は全く違う光景にも驚きました。また、ホームレスの方が想像以上に多く、衝撃を受けることもあり、実際に暮らしてみないと見えてこないこともたくさん経験できました。

私は滞在中、寮生活をしていました。

学校の専属の寮ではなかったため、他大学の音楽学校に通う生徒や働いている人について様々なと関わる事が出来ることに魅力がなした。留学に来てから人生で初めて自炊生活を送ったため、最初の頃は自由時間のほとんどを食料の買い出しと料理に費やしていました。キッチンには共同、他国の人と話ししたり、韓国人の子たちが韓国料理を振舞ってくれたりと何回かパーティーもあり、楽しい文化交流ができました。

学期の間の長期休みには様々な国に訪れて観光を楽しみました。大学でできた

友達とイタリア周遊をしたり、早稲田の友達とパリで再会したり、初めての一人旅に挑戦したりもしました。

様々な場所へ行けば行くほど自身の世界が広がっていくようで本当に貴重な経験ができたと思います。

留学中は楽しいことと同じくらい辛いこともありましたが、100%行ってよかったと思います。留学を通じて自身の視野が本当に広がったからです。

日本では海を越えた戦争や地震などが他人事のように感じられませんが、海外にいるとそれらの影響が自身に及ぶ危険性を常に感じました。安全面や清潔面において日本ほど良い国はないと思います。また日本の漫画やアニメ文化が大好きで日本語を学んでいる人になくさん出会う一方で、アジア人差別的な行動を会った人や子供と街ですれ違わないこともあるという、日本にいたら絶対にしないであろう経験もし、自分なりに考えることがたくさんありました。

また、留学を通じて世界史や宗教についてもっと学びたいと思い、更に自身のカリヤアについても深く考えるようになりました。

最後に、留学を通じて思ったことは、自分が想像していた以上に自分の将来は可能性があるとということでした。たくさん人の人と出会い、様々な人生を知り、選択の枝が増えました。最近就職活動が始まり、どうしても大きな企業に就職がとりに目が行きがちですが、留学で得た経験とを忘れずに自分自身の人生についてもう一度考えてみたいと思います。